

令和 4 年 6 月 29 日現在

機関番号：24402

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K12935

研究課題名(和文)20世紀における美術の制度変化の歴史社会学：市民社会と国家に着目した日英米の比較

研究課題名(英文)Comparative Historical Study of Institutional Change of Arts in 20th Century

研究代表者

笹島 秀晃(Sasajima, Hideaki)

大阪市立大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：30614656

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、20世紀の都市における美術の制度変化を、日英米の三都市(東京・ロンドン・ニューヨーク)を事例とした比較研究を行うことによって明らかにすことを目指した。具体的には、各都市のアーカイブで収集可能な一次資料や二次文献といったデータに基づきつつ、作品の生産・流通・受容の安定的なやり取りを成り立たせる、社会的なネットワークの変化の分析である。こうした研究を通して、とくに美術館、画廊、大学施設の作品流通における関係性の変化をデータに基づいて明確に記述したことが本研究の成果である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

東アジアの諸都市において、西欧や北米主要都市における美術を支える社会的な仕組みは、つねに見習うべき先駆的事例であり、また模倣の対象であった。本研究で明らかにしたのは、こうした西欧や北米諸都市の社会的な仕組みを、社会制度として概念化し、歴史資料の分析や、社会ネットワーク分析といった手法をもちいて変化の過程を明らかにすることであった。明らかにされた知見は、今後、西欧や北米の事例を理解する際に、新たな視点からアプローチすることを可能にするという学術的・社会的意義を有している。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to examine institutional changes in urban art in the 20th century through a comparative study of three cities (Tokyo, London, and New York). Specifically, I analyzed the changes in the social networks that enabled the stable exchange of production, distribution, and reception of artworks, based on data such as primary sources and secondary documents that could be collected in the archives of each city. Through this research, I have clearly identified, based on data, the changes in the relationships among museums, galleries, and university facilities in the distribution of artworks.

研究分野：都市社会学

キーワード：美術 制度変化 社会ネットワーク 東京 ロンドン ニューヨーク

1. 研究開始当初の背景

本研究は、「20世紀において、都市における美術の制度をになう中心的領域が市民社会(都市富裕層)から国家へ移行することによって、いかなる制度変化が生じたのか」、さらに「こうした美術の制度変化に関して、多国間の事例を比較検討した場合、いかなる要因が事例間に見られる共通性と差異性を生み出すのか」を問うものである。

本研究の学術的背景には、芸術社会学の組織・制度論における研究の進展とその課題があった。芸術社会学の組織・制度論は、芸術と社会の関係性を明らかにするために、作品をめぐる生産・流通・受容を成り立たせる個人や組織の活動・物質的資源・慣習(分業の共時的側面)や、そうした関係性の変化(分業の通時的側面)を研究することを基本的な課題としている。1960年代のM・アルブレヒトやH・ホワイトとC・ホワイトの研究をもって嚆矢とし、その後のH・ベッカーのアート・ワールド論、R・ピーターソンによる文化生産論、またP・ブルデューの芸術界の研究によって基本的な問題設定が提示された。

国際社会学会のRC37(Sociology of Arts)や学術雑誌のCultural SociologyやPoeticsは、当該分野の国際的な研究発表の場であるが、近年、比較分析による美術の制度変化の研究が登場し始め一つのフロンティアを形成している。代表的にはH・V・マーネンによる比較分析のための理論研究や、O・ヴェルトイスによるグローバルな美術市場の研究である。こうした最新の研究それ自体は高く評価されるべきであるが、同時に、課題も存在する。それは長期的スパンのなかで現象の変動を検証する視点の欠如である。その視点の欠如は、とくに20世紀の制度変化の研究に顕著であった。ブルデューやホワイトらの制度変化研究は、もっぱら1900年代を分水嶺とする、前近代的制度から近代的制度への移行を対象としていた(王侯貴族による庇護から市場における批評家・画商中心の制度)。また、ヴェルトイスらによる最新の研究は、2000年代以降の変化に関心が向けられている。

芸術社会学の組織・制度論において、20世紀の各時期に進展した美術の制度変化に関する研究はあった。佐藤郁哉やV・アレクサンダーによる第二次大戦後の福祉国家形成期に進展した文化政策の研究である。しかし、こうした短いスパンの断片的な変化を研究するだけでは制度変化を詳細に明らかにすることは難しい。なぜなら、政治学者のポール・ピアソンが述べるように、制度変化は長期的なスパンの中での因果的過程を分析することによってこそ解明できるからである。20世紀前半に生じた市民社会領域における慈善活動の興隆が、それ以前の時代に比べてどのような新しい制度変化をもたらしたのか。また、市民社会領域を基盤にして形成された美術における制度が、およそ50年後の1970年代になり国家の介入によってどのように変化したのか。先行研究で断片的に検討された論点を、長期的なスパンの中で位置付け直し、そうして得られた視点をもとに、あらたに史資料の検証を行うことによって、これまでにない美術の制度変化に関する理論的知見を提示することが必要であった。

2. 研究の目的

本申請研究の目的は、芸術社会学の組織・制度論における問題を解決するために、20世紀(1920年代から80年代)に進展した美術の制度変化を明らかにし当該分野へ貢献することである。

本研究の独自性は三点ある。第一に、「20世紀」という比較的長期のスパンに着目した制度変化の研究であること。第二に、美術の制度変化における市民社会や国家の影響に着目すること。第三に、歴史資料などの確かなデータに基づいた比較研究を行うことである。美術の制度変化に関する多くの先行研究は、基本的には19世紀以降一貫して進展する美術市場の爆発的な拡大に注目しつつ、西欧や北米の事例にのみ注目していた。本研究はそれに対し、市民社会や国家という非市場領域に注目する。市民社会や国家による制度形成は20世紀に進展したが、黎明期であるその時期に注目して制度変化を分析することは、現在の美術の制度を理解するにあっても大きな意義を持つ。

3. 研究の方法

本研究では、20世紀(1920年代から80年代)に進展した美術の制度変化を検討する。そのために、東京(日本)・ロンドン(イギリス)・ニューヨーク(合衆国)の3都市に注目し、史資料を中心にした事例の記述に基づいて比較分析を行う。事例選択は、東アジア・ヨーロッパ・北米から主要な都市を選ぶことで、少数ながら多様な文脈に位置づく事例を選出するという理論的な理由と、史資料収集のためのアーカイブが充実している国を選択したという方法上の理由による。また、本研究では、研究対象を把握しやすくするため操作的に美術(絵画や彫刻)領域のみを対象とする。

本研究で解明するのは、制度変化のなかで、1)作品の生産・流通・受容のネットワークには

どのような変化が生じるのか、2)作品の評価や価値づけの過程がいかに変化するのか、そして3)歴史的・制度的背景が異なる国家間を比較した場合、市民社会や国家による制度変化の過程にはいかなる違いが生じるのか、という論点である。

こうした論点を、20世紀の美術の制度変化における二つの重要な時期とその移行過程に注目しながら検討していく。一つは、20世紀前半における都市の富裕層を中心とした美術をめぐる慈善活動(フィランソロピー)が進展した時期であり、もう一つは第二次大戦後以降の国家の文化政策による美術の制度形成期である。

三都市美術業界をめぐる1920年代から80年代までの年譜、関係者図の作成
三都市の美術業界における基本的な出来事を確認するために年譜を作成しつつ、重要な担い手をリストアップする。研究方法は、美術史の研究書、美術年鑑といった業界年次記録資料、新聞美術欄、電話帳を用いた資料分析である。

史資料分析による美術制度の記述

【対象】先行研究では美術制度を記述するために、分業における役割に応じて研究対象をピックアップしてきた。具体的には、1)生産をになう芸術家、2)流通をになう画廊、3)受容(鑑賞)の場となる美術館である。本研究でも、これら三つの担い手に着目する。特に明らかにすべきなのは、これらの個人や組織の活動状況や相互の関係性、また作品の評価や価値形成をめぐる過程である。

【史資料】当事者の自伝・評伝・オーラルヒストリー、美術館の年次活動報告書、当事者の書簡・活動記録などの一次資料 収集場所:British Library(ロンドン)、Archive of American Art(ワシントンDC)など

4. 研究成果

本申請研究は、20世紀にわたる美術の制度変化を日米英の国際比較を行うという目的で研究をスタートさせた。しかし、次に示す主に二つの理由によって国際比較に関する研究の推進を大幅に変更し、最終的に合衆国・ニューヨークにおける美術の制度変化を分析を中心とする研究成果を発表するに至った。変更の理由の一つ目は、新型コロナウイルスの流行のため研究期間の3年目、4年目に行う予定であった海外での資料収集活動を十分に行うことができなかったため、当初の研究計画から方針を大きく変えざるを得なかったことにある。変更の理由の二つ目は、研究を進める中で、既存資料をもちいて美術の制度変化に関する計量的な分析を行うという、当初の研究計画に勝るとも劣らない新たな着想を得たためである。

このような理由のため、研究の過程の中で日本や英国に関する資料はある程度はあつまり当初の研究計画に従った国際比較研究の成果をわずかながら発表したものの、本申請研究において最も重要な研究成果となったものは、合衆国・ニューヨークにおける美術の制度変化を、質的・量的資料を用いた多角的分析に関連する論文となった。

国際比較の研究では、日本と米国における市民社会領域の美術の制度比較を行うために、とくに富裕層によるミュージアム建設といったパトロナージ活動の比較検討を行った。米国においてはメトロポリタン・ミュージアムやニューヨーク近代美術館、日本においては大倉集古館、大原美術館や三溪園を取り上げ比較分析した。日本と米国においてはミュージアム建設に費やされた資金やまた建築物の規模には大きな違いがあるが、富裕層の外遊といった相互交流のネットワークの中で近代的なミュージアムの建設という制度変化が生じたことを指摘した。

ニューヨークにおける美術の制度変化の研究においては、第二次対戦後ニューヨークで活躍した40人程度の作家の展覧会歴のデータをもとに、商業画廊・ミュージアム・大学関連美術施設といった作品展示を担う組織の関係性が、どのように変化したかを社会ネットワーク分析の手法で明らかにした。先行研究では、第二次世界大戦後以降、商業画廊とミュージアムの連携が強化されたことが指摘されてきたが、今回の申請者の分析によって、あらたに大学関連美術施設のデータを組み込むことによって、より多様な美術の制度変化を描くことが可能になった。この成果は、国際的に評価の高い海外ジャーナルに単著論文として掲載されるに至った。

また、こうした制度変化の分析を進める中で、相対的に劣位に置かれていたアーティストたちの活動のもつ意義が明らかになり、それらの活動を資料に基づいて紹介する論文を発表した。具体的にはニューヨークにおけるオルタナティブ・スペース・ムーブメントの活動である。ニューヨークの美術業界がより商業的に制度変化していく中で、そうしたメインストリームに異議申し立てをする対抗的なアート活動が、より顕在化していく過程を記述することによって、美術の制度変化における新たな側面が明らかになった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 笹島秀晃	4. 巻 -
2. 論文標題 移動で捉え直すミュージアムの思想	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 伊豫谷登士翁 / テッサ・モーリス＝スズキ, テッサ / 吉原直樹『応答する 移動と場所』	6. 最初と最後の頁 112-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Sasajima Hideaki	4. 巻 -
2. 論文標題 Organizational account of symbolic boundaries in urban cultures: social network analysis of New York art world from 1940 to 1969	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Poetics	6. 最初と最後の頁 101688 ~ 101688
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.poetic.2022.101688	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 笹島 秀晃	4. 巻 73
2. 論文標題 ニューヨークにおける1960年代後半以降のオルタナティブ・スペースの展開	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 人文研究	6. 最初と最後の頁 113 ~ 130
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24544/ocu.20220416-004	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 笹島秀晃
2. 発表標題 1940-70年ニューヨーク・アート業界のネットワーク分析
3. 学会等名 日本社会学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 笹島秀晃
2. 発表標題 1940-80年代ニューヨークにおけるアートワールドの展開 - 芸術家のオーラルヒストリーからみえる意味世界
3. 学会等名 日本都市社会学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 笹島秀晃
2. 発表標題 芸術にとって国家はなぜ問題なのか？芸術社会学における組織・制度論の視点
3. 学会等名 日本社会学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hideaki Sasajima
2. 発表標題 States' Interventions and the Transformation of Urban Art Worlds
3. 学会等名 International Sociologica Association
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------